

中国の小学校における写字学習の一考察 ～日本の書写学習指導方法に基づいて～

A Study of Calligraphy Learning in Chinese Elementary School
—Based on Japanese Instruction Method for SHOSHA Learning—

和田 圭 壮 李 峰

WADA Keiso
美術教育講座

Li Feng
本学大学院 美術教育専攻
平成19年3月修了生

(平成20年9月30日受理)

はじめに

日本の学校における書教育は、小・中学校においては、「国語科書写」の中で、「文字を正しく整えて書く」という、いわゆる整齐美の学習によって、毛筆学習は硬筆の基礎を養うための学習となっている。その学習を経て、高等学校においては、「芸術科書道」によって多様な美の学習に発展するという構造になっている。

本研究は、中国の小学校において、日本の現行学習指導要領の位置づけに基づいた書写の学習指導方法によって授業を進めた場合、いかなる問題や課題が出てくるのか、その授業を参観された中国小学校の先生方はどのように感じられるのか等、その授業を検証し、ひいては中国の小学校写字教育に導入するにはどのような課題があるのかを考究していきたい。

なお分担は、和田が第1～2章を主に担当し、李は、第3～5章を主に担当した。そして、アンケートの分析及び中国での授業についての反省と課題については共同で考察した。

1. 日本の書写学習指導について

日本の平成10年版『小学校学習指導要領解説国語編』〔第3学年及び第4学年〕の書写に関する事項において、次のような表現で、硬筆と毛筆の関連学習について記述されている。

「硬筆では」とか「毛筆では」というように限定してしまうのではなく、緊密な関連の中で各事項を位置付け、確実な書写能力の向上を目指したい。毛筆で獲得した書写力を、日常の硬筆書写に生かすためにも、硬筆と毛筆の関連学習はもとより、硬筆と毛筆とが一体化した学習指導をも取り入れながら、日常に生きて働く書写力の育成に努めたい。

「硬筆と毛筆の関連した学習指導」という表現ではなく、「一体化した学習指導」という表現が使用されており、硬筆学習と毛筆学習が、一単元あるいは一単位時間に一体となって展開される学習が必要とのことである。

また、同じく平成10年版学習指導要領の総則において、「自ら学び、自ら考える力を育成すること」や「個性を生かす教育の充実」といったことが、全ての学習に対するこれからの課題として述べられている。書写の授業において、どのような指導方法でこれらを反映し、児童・生徒の学習を支援したらよいか求められている。

2. 「硬筆と毛筆の一体化」した学習指導の授業実践について

和田は、「硬筆と毛筆の一体化」した学習指導について、平成13年当時兵庫教育大学小竹光夫助教授の助言を得て、半紙ではなくザラ紙による学習指導を以下のように続けてきた。

平成13年11月 筑後市立筑後小学校国語科書写
3年生「山里」(2h)

平成14年1月 福岡教育大学附属小倉中学校
国語科書写1年生「元気」(3h)

平成14年9月～12月 三池郡高田町立竹海小学
校国語科書写5年生「希望」(4h)

平成15年9月～11月 柳川市立矢留小学校国語
科書写6年生「美しい朝」「記念」「創造」(11
h)

平成16年9月～11月 三井郡大刀洗町立大刀洗
小学校国語科書写3年生「月」「ビル」「にじ」
「はと」(11h)

平成17年10月 久留米市立下田小学校国語科書
写5年生「読む」(4h)

平成18年 三潞郡大木町立大莞小学校国語科書
写6年生「ふれあい」「世界」(4h)

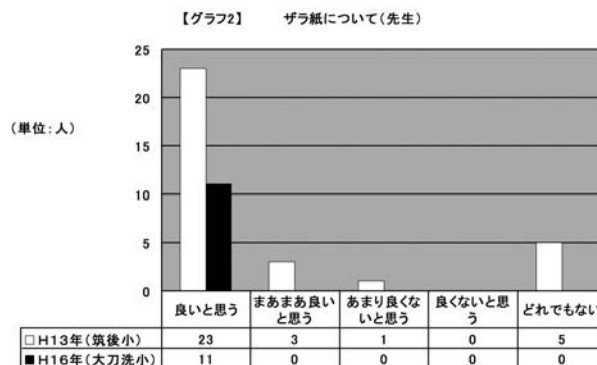
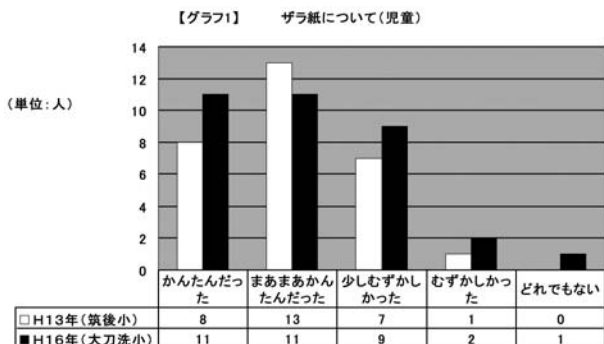
平成19年 八女郡立花町立上辺春小学校国語科
書写5年生「馬車」「すばる」(6h)

こうした中で、筑後小学校及び附属小倉中学校
の実践によって、ザラ紙の活用が「硬筆と毛筆の
一体化」に有効であることを実証し、その研究成果^{*1}
を発表した。

平成16年大刀洗小学校の授業実践は、平成13年
筑後小学校での授業実践と同じ3年生での実施で
あったため、筑後小学校でのアンケート調査との
比較を行うため、授業を受けた3年生及び参観さ
れた教員にアンケートを実施した。教員へのアン
ケート数は、平成13年度の32名に比べ平成16年度
は11名とかなり少なくなっている。これは、当日
の参加者が相対的に少なかったことと、回収方法
の違いによると考えられる。

2. 1 ザラ紙について

【グラフ1】のとおり、ザラ紙の使用について、
児童の回答では学年は同じ3年生であり、ほぼ同



じ結果であると言えるのではないだろうか。先生
の場合は、【グラフ2】のとおり、平成16年度は
全員が「良いと思う」の回答である。その感想や
意見として次のようなことが書かれていた。

- (a) 下敷きをしている新聞紙に次々にはさんでいけるので便利だと思う。
- (b) 机の回りがスッキリしていてよいと思います。
- (c) 床に置く必要もなく、いいと思います。
- (d) ためしを入れておき、比べることができる。
- (e) 下敷きがそのまま、書き終えた紙の置き場所になっていて、姿勢をかえずに前に書いた分を取り出すことができるのも良いと感じました。
- (f) 練習した紙を新聞紙に挟めるのがよい。動きが少なくよい。にじんだり、半紙が破れたり、半紙で書くことに抵抗がある子にもザラ紙だと書きやすい。
- (g) 筆で書く場合は、下敷きが新聞紙ではかたく書きにくいのではないかと感じました。しかし、最初から下敷きを使わないのであれば、慣れていくのかもしれない。
- (h) 筆の上下運動があまり出来ないように思います。
- (i) 最初の時間に形をとった、なぞり用の手本を渡しています。その時ザラ紙を使用しています。子どもたちには違和感はないようです。

(a)～(f)のように下敷きの新聞紙が良いという回答が多かった。このことは、先生用アンケートの質問項目が、

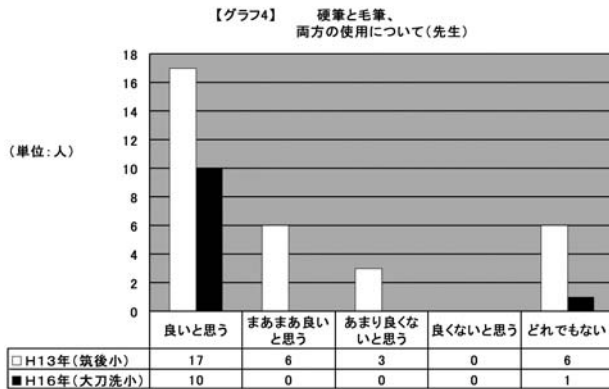
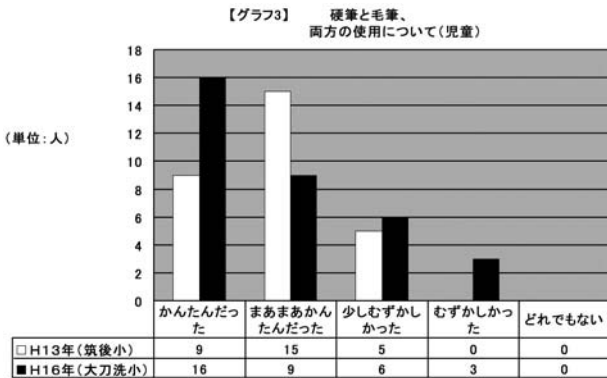
「硬筆と毛筆の一体化のために、半紙では墨が浸透しやすく、下敷きを使わなければならないことから、ザラ紙を使用し、下敷きの代わりに新聞紙を敷きました。このことはどうだったでしょうか？」

というもので、先生用アンケートでは、「ザラ紙」以外に「下敷き代わりの新聞紙」についても尋ね

*1 拙稿「硬筆と毛筆を一体化させた書写授業の試み」福岡教育大学紀要55号(平成18年2月)

ているので、このような回答になっている。平成13年度の新聞紙は、B4サイズの1枚であったものから、平成16年度は、B4サイズを4枚重ねたものにし、書いたザラ紙を挟むよう工夫したことからこのような回答になったと思われる。

また、(g)(h)のように「良いと思う」を選択していても、フェルトの下敷きで半紙に書くことの良さを守る立場からの意見も見られ、授業者に対する遠慮があり、本音での選択になっていないことも見受けられる。



2. 2 硬筆と毛筆、両方の使用について

【グラフ3】の児童の回答を見ると、「かんたんだった」が7名増え、「むずかしかった」が3名増えている。「かんたんだった」の回答をした児童は、次のような感想や理由を書いている。

- (a) ふでペンは、つかうとき楽しかった。
- (b) 筆ペンで、書いたとき、ふつうの筆より楽しく書けた。
- (c) 筆ペンは筆と同じこゆさがあるから使いやすいから。
- (d) ふでペンを使えて楽しかったです。また、やってみたくて思いました。
- (e) ふでペンのまんなかをおしたらすみがでたので、つかいやすかった。
- (f) 筆と筆ペンとえんぴつは、かんたんだったから

- しました。
- (g) えんぴつはいつもかいてるから。
- (h) つかいやすい。
- (i) やりやすかった。
- (j) ふつうにかいたから。
- (k) 家でときどき書いているから。
- (l) 小ふでのほうがむずかしかったです。

6名が筆ペンのことを理由に書いている。また、「むずかしかった」「少しむずかしかった」を選択した児童の感想や理由は、次のとおりである。

- (m) 小筆より筆ペンの方が先が細い。
- (n) ふでペンが太くなるから。
- (o) 筆ペンがよく回らなかった。
- (p) ふでペンは、ふでにしていた。
- (q) えんぴつはかんたんだけど、ふでやふでペンは少しむずかしくて、ふでペンはむずかしかった。
- (r) ふでとふでペンは手についていくからむずかしい。
- (s) スーッとはいったりするところがむずかしかったです。
- (t) かきにくかった。

どの回答も筆記具それぞれが使いやすかったかどうかを記述しており、大筆・筆ペン・鉛筆を1枚の練習用紙に書くことが、難しかったか簡単だったかという判断ではないようである。これについては、アンケートの質問が、「筆と筆ペン、えんぴつを使うのはどうでしたか？」であり、問い方が悪かったと思われる。

【グラフ4】のように平成16年度の先生の場合は、「どれもでない」を選択している1名以外は、「良いと思う」が10名である。「どれもでない」を選択しているこの先生は、次のように理由を述べている。

- (a) 本時のめあて(まがりの部分)を練習する場合、鉛筆は必要なあとと思います。

また、「良いと思う」を選択した先生の中にも次のような感想が書かれている。

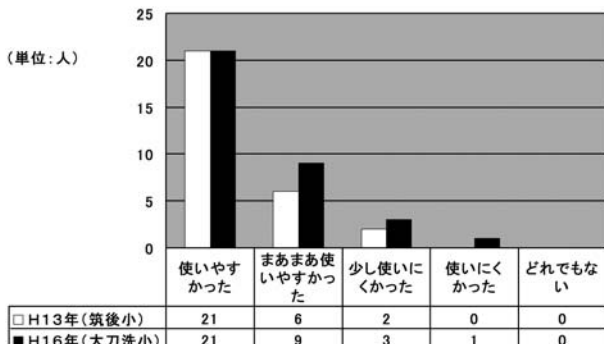
- (b) ひらがなのむすびには、小筆まででよいと思う。
- (c) 毛筆で学んだことを硬筆に生かしてよい。ただし、本時のむすび(筆を裏返して書くこと)については、硬筆に生かせるかどうかは疑問に思います。

このことについては、本時の学習テーマが、ひらがな「は」の最終画「むすび」の学習であり、

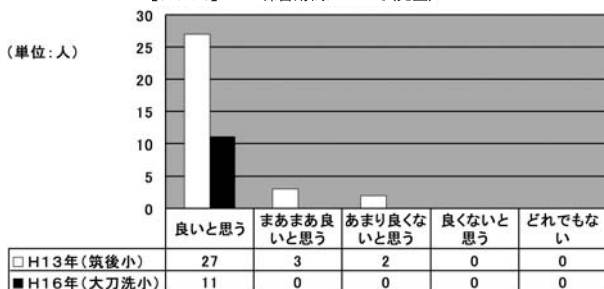
その部分での筆の穂先を裏返すという動きが、硬筆の鉛筆では理解できないことについて、硬筆と毛筆の一体化の視点に照らしたとき、整合性が無いことを指摘されている。

この点については、授業計画の段階で授業を実施する和田も頭を悩ませた所であり、授業の中では、筆を顔に見立て、軍手の表側に顔の表を書き、裏側に後頭部を書き、手のひら（軍手）で筆が裏返ることを説明した。そして、硬筆の際に「鉛筆で書くときも、小さな鉛筆の先に顔があると思いながら、くるりと裏返るように書きましょう。」と説明した。そして、この授業で常に「むすび」ばかりを練習し、まとめも「むすび」のみということではなく、最終的には「は」という文字を整えて書くための一つの要素にすぎないとも捉えた。児童には「は」という文字全体を、筆で書くのと同じような動きで書くことが大事であること、そして、筆と同じように筆圧の強弱や「とめ」「はね」「はらい」等に気をつけて書くことを、授業の中で伝えた。

【グラフ5】 練習用紙について(児童)



【グラフ6】 練習用紙について(先生)



2. 3 練習用紙について

5種類の練習用紙とも、大筆→筆ペン→鉛筆という流れで練習できるように作成していた。【グラフ5】のように、児童アンケートでは、「少し使いにくかった」「使いにくかった」が増えているが、これについては、その感想に4名中2名が次のような記述をしている。この記述から「使いにくかった」理由は、筆記具が3種類ある煩雑さからではないようである。

- (a) ふでは1回書けばしゴムでけせない。
 (b) なぞったりするのがむずかしかったからかきました。(他の2名は無記入)

「使いやすかった」「まあまあ使いやすかった」の回答をした児童の中に、次のような感想を書いている児童がいた。

- (c) 半紙よりは、使いやすかった。わけ えんぴつで書くところや筆ペンでするところもあったから。
 (d) えんぴつとかの練習があってよかったと思う。

このように、大筆以外の筆記用具が良かったことを記述している児童もいた。

福岡県筑後地区において、平成16年度まで、5年間ザラ紙を使った研究授業を続け、徐々に硬筆と毛筆の一体化の考え方が現場に浸透したからであろうか。アンケート調査の結果では、先生からの回答数は少ないものの、こうした書写の授業に賛同をしていただいた。大筆→小筆→鉛筆の学習の流れを繰り返すことについて、近年多くの小学校で取り入れている45分授業の2単位時間連続(隔週)であれば、十分可能と考えられる。

こうした硬筆と毛筆の一体化を図ったザラ紙の使用や、「自ら学び、自ら考える力を育成すること」や「個性を生かす教育の充実」といった視点に立った日本の書写学習方法に基づいて、中国の小学校において李が実践授業を行ってみた。以下に中国での小学校写字教育について、及び実践授業から見てきた今後の課題等を述べる。

3. 中国の小学校語文写字教育について

3. 1 「小学語文教学大綱」の改定

日本の学習指導要領に相当するものが中国では、「教学大綱」である。小学語文つまり、小学校国語科の「教学大綱」は、1952年に出された「小学語文課程暫行標準(修正草案)」をもとに1993年までに以下の通り5回にわたる改訂を経ている。

- (1) 1956年「小学語文教学大綱(草案)」
- (2) 1963年「全日制小学語文教学大綱(草案)」
- (3) 1978年「全日制十年制学校小学語文教学大綱(試行草案)」
- (4) 1987年「全日制小学語文教学大綱」
- (5) 1993年「九年義務制教育全日制小学語文教学大綱(試用)」

1986年には、義務教育法が公布されており、教学大綱の改正はさらに進められた。広く学識経験

者、国語教師に意見を求め、大規模な調査研究の上で慎重に作成され、1988年に初稿版を試用に供し、各方面からの修正意見を容れ更に大幅な改正を経て、1993年「九年義務教育全日制小学語文教学大綱（試用）」として正式に公布された。

1993年「九年義務教育全日制小学語文教学大綱（試用）」の構成は、次のようになっている。

- 1, 前言
- 2, 教学目的和要求
- 3, 教学内容和教学提示
 - ①語言文字訓練方面
 - ②思想教育方面
- 4, 課外活動
- 5, 教学中應該注意的幾個主要問題
- 6, 各年級的具体教学要求

3. 2 「九年義務教育全日小学語文教学大綱」における写字に関する内容

中国において、学校教育の中で、「書写」に相当する語として「写字」がある。そして、中国では、漢字（文字）を書くこと、その行為そのものも「写字」と呼び、硬筆も毛筆も含まれる。「書道」は「書法」であり。毛筆を用い、しかも、芸術性を要求する場合に用いられることが多い。したがって、「写字」と「書法」とは、日本の「国語科書写」と「芸術科書道」とよく似た関係にあると言える。ただし、現状では中国の学校教育の中で位置付けがされているのは、小学校語文（国語）科における「写字」のみで、初級中学校（日本の中学校に相当）の語文科での比重は極めて低い、また、高級中学校（日本の高校に相当）の教育課程に「書法」は存在していない。1993年改定された「九年義務教育全日小学語文教学大綱」の中で写字に関する内容については次のように述べられている。

写字は、国語の基本訓練のひとつである。生徒の文化的素養を養うのに重要な作用をもたらす、低学年の内から写字の基礎をしっかりと築いておくべきである。一年次より厳しい要求と、しっかりとした訓練をもって臨み、生徒の写字能力を徐々に向上させていかなければならない。学習指導の中で教師は生徒が写字の楽しさを覚えさせ、正しい写字姿勢と筆記具の持ち方と運筆の方法とを教え、漢字の筆画、偏旁、間架結構を掌握させなければならない。

鉛筆と万年筆で正確にきちんと、きれいに書きしかも配列が整って一定の速さで書けるようにしてい

かなければならない。毛筆で文字を書くことを重視し、その書き方の指導を確実に強化していかなければならない。描紅から倣影を経て臨帖へという過程をとり、つりあいよくきれいに書くようにしていかなければならない。児童がまじめに字を書き、用具を大切にすることを養うように留意しなければならない。書法を愛好するものについては、これを励ましてやらなくてはならない。

ここでは、まず写字教育の意義及び、低学年での指導を徹底させることが強調されている。そして、写字の楽しさを覚えさせるという表現も新たに加えられている。また「毛筆で字を書くことを重視し、その書き方の指導を確実に強化していかなければならない。」と毛筆での写字を重視し、これを強化する姿勢が打ち出されている。

また、1997年中国教育部が公布した「九年義務教育全日小学写字教育指導綱要（試用）」では、次のように指摘している。

写字は児童が備えるべき重要な国語の基礎的訓練の一つである。写字教育は小学校の国語の教育において重要な構成部分である。写字教育をきちんとすることは、児童の学習と今後の仕事に対して重要な作用をもたらす。…中略…

小学校において写字の授業の目的は、児童達は鉛筆と万年筆で文字を書く上で、毛筆を学び、漢字を正しく書く能力を育て、授業の成果を定着させる。そして、我が国の言語と文字を心から愛する心情を養う。情操を薰育し、審美の能力を高め、まじめな学習態度と意志と良い品格を身につける。

「情操を薰育し、審美の能力を高め」という記述に見られるように、中国の場合、日本の「毛筆書写」に対応する「毛筆写字」という表現は見られない。「写字」の一部として「書法」が存在するのである。現実に学校現場では、「写字」と「書法」を厳密に使い分けていない。小学校の段

【図1】



階から、「描紅」と「倣影」が行われ、その次に「臨帖」の文字を学習するが古典から採用したものが多く【図1】。日本と違い、芸術性を多く含んだ扱いになっている。

3.3 中国の写字教育の実態について

3.3.1 「義務教育段階の中・小学生の写字教育の強化に関する通知」より

1986年の中華人民共和国公布により小学校・中学校を通しての9年間が、義務教育として正式に扱われるようになった。1990年10月29日付けで、国家教育委員会から各教育委員会にあてて「義務教育段階の中小学生の写字教育の強化に関する通知」が出されている。以下に小学校写字に関する部分訳を載せる。

写字は義務教育段階における基本訓練の一つである。きちんとした字を書くことは生徒の学習と将来の仕事に重要な作用を及ぼす。数年来、ほとんどの小学校と一部の中学校では、写字教育が重視されている。しかし、一部の小学校の高学年と多くの中学校ではあまり重視されているとは言えず、生徒に対する厳しい要求と訓練とが不足しており、生徒の写字についての問題が多く、良好な写字習慣に欠けている。筆跡はいい加減で、行も整っていない。答案もきれいでなく、基準通りではない簡体字があふれ、誤字を書いてしまっているという現象がしばしば見受けられる。こういう状況を改善し、写字教育を強化し、義務教育段階の中・小学校に対する教育の質を高めるために、ここに以下の通りの意見を示す。これを参考によくご配慮願いたい。

i, 全日制五年制ないし、六年制の小学校では有力的な措置を講じて、教育計画において写字の授業を確保し、写字教育の質をより一層高めなければならない。その類の小学校においても一定の訓練の時間をとり、小学語文大綱の写字教育に関する要求を達成できるようにしなければならない。

ii, (中学校に関して) (略)

iii, 小学校および中学校の教師は、生徒の写字に関して厳しく要求し、指導を強め、良好な写字習慣を養わなければならない。作文や各教科における課題、また試験答案の書き方のすべてにわたって、正確にきちんとはっきりと行を整え紙面を汚さずきれいに書くように生徒に要求しなければならない。書き方がいい加減の場合は、適切な措置を講じ、適宜これを矯正し、必要とあれば課題や作文、試験の成績をさげることも必要である。

iv, 各学校では実情に即して、普段の写字教育を強

化することに加え、課外活動を設け書法愛好者の参加を求め、定期的に書法の練習会や展覧会を開き、生徒の興味関心や、この方面での才能を養い伸ばしていく。

v, 一綱多本(一つの大綱に多くの教科書)の原則に従う。条件的に可能な省や自治区、直轄市あるいはほかの関連部門において、義務教育段階で写字教材とそれに関する指導書を編集するべきである。(略)

vi, 教師の資質を高めること(略)

1990年のこの通知では1984年の「小学生の写字訓練強化に関する通知」よりいくらか改善がみられ、小学校で写字教育を重視し、これを強化させる姿勢が打ち出されている。しかし、「一部の小学校の高学年と多くの中学校」において、指導が十分ではないとしており、結果として、「筆跡はいい加減で、行も整っていないし、答案もきれいでなく、基準通りではない簡体字があふれ、誤字を書いてしまっているという現象がしばしば見受けられる。」ということになっている。日本においても中学校において十分な書写指導の時間が確保されていない現状があり、相通ずる部分があると言える。

3.3.2 「教育改革の深化と資質教育の全面的推進に関する決定」より

1999年、国務院(内閣)は、教育改革および発展のための総合プロジェクトをまとめた「21世紀に向けた教育振興行動計画」を公表した。さらに、同年6月に党中央とともに全国教育工作会议を開催し、同時に「教育改革の深化と資質教育の全面的推進に関する決定」を発表し、創造性の育成を中心に据えた「資質教育(原語:素質教育)」教育改革の前面に押し出した。中華人民共和国の教育改革は新たな段階に入ったのである。

「資質教育」は1993年頃から政府によって提唱されており、長年問題とされてきた受験偏重教育(受験のため、語文、数学、英語など主科目のみ重視され、写字、美術、音楽など副科目を軽視されること)からの転換を求め、美育、德育、体育面を含めた子どもの様々な資質を伸ばそうとする教育とされ、初等・中等教育を中心に推進を訴えられたきたもので、新たな世紀の到来を控え、更に、養うべき資質の中心として「創造性」が明確に打ち出され、すべての教育段階および学校外の教育へとその範囲を広げ、「前面的に推進」することとなった訳である。

大学受験を頂点とした受験競争は、小学校段階までに及んで過熱化し、受験偏重教育による児童生徒の過重な学習負担は長年問題視されてきていた。これに対して政府は、1980年代から、抑制を求める動きを示し、受験教育を助長する事柄は規制されていた。例えば、能力別学級編成や受験参考書類の自由出版、学習塾的な性格を持つ課外学校や補習授業、学力コンクールは原則的に禁止された。しかし、これらの措置は実質的に効果をもたらさず、ますますその弊害は大きくなっていくと認識されている。教育部では2000年1月テレビ会議を開くとともに「小学校における児童の過重負担軽減に関する緊急通知」を出し、補習の禁止、宿題の制限など負担軽減のための対策を改めて指示した。

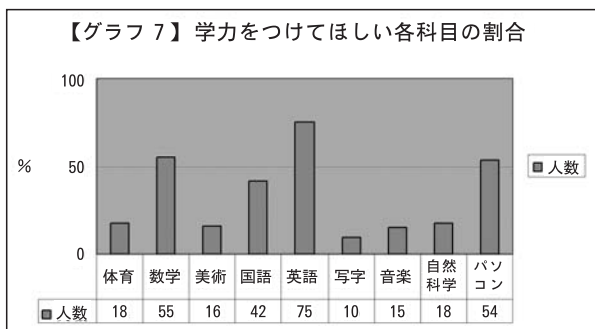
「資質教育」は、政策上長年求められている。しかし、実際のところ少数の省・市重点小学校のみ積極的に進られ、多くの小学校では浸透していない。

写字の場合も同じであり、一般の小学校では写字の授業が重視されず、写字の授業時間に他の主科目の授業を行う場合がある。しかも、1クラスの児童の人数多く、一人一人のスペースが狭すぎるため、毛筆授業を実施していないという学校も多い。

3.3.3 一般市民の意識から見る写字教育の実態

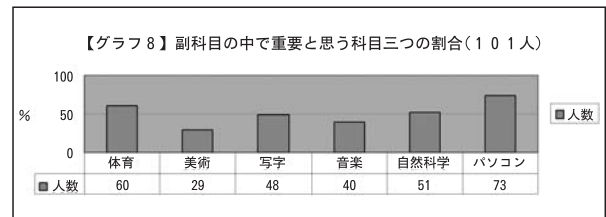
2006年の12月、中国遼寧省大連駅で、一般の市民（101人）にアンケートを実施した。内容は、一般の市民は写字についてどのような考えを持っているのか。また、写字は小学校の各授業科目の中で重要かという点で、質問項目は以下の2問である。

①「以下の小学校の授業科目中で、特に学力を付けてほしいと思う重要な科目を3つ選んで○をつけてください。」



②「以下の副科目の中で、重要と思う科目を3つ選択し、①、②、③の順番で番号をつけてくだ

さい。」



結果は、【グラフ7】のように、予想通りすべての科目の中で、特に学力を付けてほしいと思う重要な科目は、1番に英語（75人で74.2%）、2番に数学（55人で54.4%）、3番にパソコン（54人で53.4%）という結果が出た。写字を選択した人数は1番少なく、10人で9.9%であった。

アンケート②は、主科目を除いて、すべての副科目の中で重要だと思う科目を3つ選択し、重要と思う順番に①②③をつけてもらった。理由は、副科目は受験進学との関係が薄く、各副科目の中では何を重要視しているのか、写字についての重要性をどの程度考えているのか、本心が見えてくると思ったからである。

写字が1番重要（①を選択した人数）だと答えた人は18人で、2番目に重要（②を選択した人数）だと答えた人は19人、3番目に重要（③を選択した人数）だと答えた人数は11人であった。また、【グラフ8】のように、写字について、①、②、③を選択した人数は合計48人で、6つの副科目の中で4番目であった。

なぜパソコン、自然科学と体育を選択する人数が多いのか、写字は少ないのか、その理由についてアンケート回答者の理由をまとめると次のようになる。

- パソコン：①現在普及されている。
②便利である。
③将来仕事する時にとても必要である。
- 自然科学：①子供にとってとても面白い。
②生活に役立つ。
- 体育：①環境が悪い（空気・水が汚い）ため、体を鍛える必要がある。
②一人っ子であるため、親達が子供の体調を心配している。
- 写字：①重要だと思うが、書いた文字が読める程度で十分である。
②パソコンの時代になっているから。

以上の結果で、一般市民の中で、写字が重要と思う意識を持っている人が少ないということがわかった。これは、受験偏重教育の影響がまだ強く受けられていることがわかる。また、中国では就

職状況が次第に厳しくなっており、若者が大学卒業をしても仕事をもらえないという現状がある。保護者たちは、自分の子どもたちが将来良い仕事に就けるため、豊かな生活を送れるためにも、このアンケートで、進学と実生活のためとして、これらの科目を選択したのであろう。「資質教育」の重要性について、多くの人が理解できると考えるが、厳しい現実において、上のような結果が出たことは必然的と考えられる。

また、アンケート調査中、文字の読み・書きがまったくできない人（ほとんどが農民で、中国の人口13億人中、約9億人である）もいた。その人たちは、子どもの頃、生活が貧しく学校で勉強をすることができず、現在も、文字の読み・書きができなくて困っていることが知られている。そのため、自分の子どもにはきちんと文字の読み・書きができて欲しいと願うため、写字を選択した場合が多い。その人たちを除くと、一般市民の中で写字を選択する割合は更に低いと考えられる。

3.3.4 山東省の小学校写字教育の実態について

山東省小学校の場合は、一般的に、3年生の後期から毛筆の授業が始まり、硬筆と毛筆は隔週で別々に授業を行うことになっている。2005年9月中旬、筆者は山東省済寧市霍家街小学校で、写字の授業を見学し、写字教育の実態を考察することができた。この小学校では、写字の授業はすべて国語の先生によって行われている。（以前は美術の先生が行っていた。）1年生と2年生は硬筆（鉛筆のみ）の授業で、3年生から万年筆の授業が始まり、3年生の後期から毛筆の授業が始まる。硬筆と毛筆は隔週で別々に授業を行っている。一般的な指導の流れは、以下のようである。

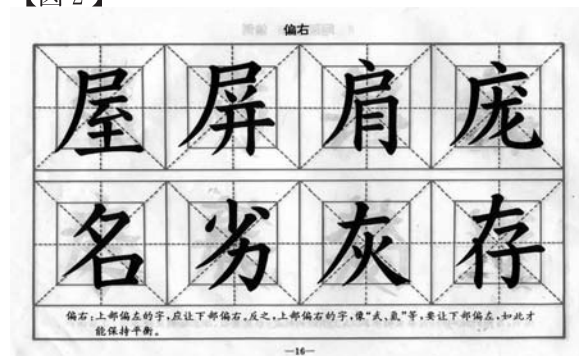
- 1 課題を掲示する。
- 2 目標を示す。
- 3 先生が書いてみせる（範書する）。
- 4 書き方を指導する。
- 5 児童が練習する。
- 6 批評添削指導する。
- 7 それをもとに更にしっかりと練習する。
- 8 宿題を出す。

1クラスの児童数が多く、学習内容も非常に多い。授業の中で、児童は教師の話を聞く時間が多く、自ら考える時間は少ない。また、中国では、受験（進学）に力を入れる教育が主の小学校では、一般的に写字の授業が重視されず、写字の授業時

間に他の科目の授業を行う場合が少なくない。今回実践した済寧市霍家街小学校においても同様である。

この小学校が使用している教科書【図2】は、山東省人民出版社が1993年に始めて発行した『九年義務教育山東省五年制小学／写字』（2001年11月第9次印刷）という教科書をいまだに使用していた。先生用の教学指導書は、山東省人民出版社が1993年に発行した『九年義務教育山東省五年制小学・写字・教学指導書』（2004年11月第9次印刷）という指導書を使用していた。

【図2】



4. 日本の書写指導方法による中国小学校での写字の授業実践について

4.1 実践授業概要

2005年12月に試行授業として、5年生1クラス91人の授業を行った。そして、2006年3月、児童の人数を減らし、前回の授業を受講した児童の中から36人を無作為に抽出した。減らした理由としては、何よりも前回12月の試行授業を踏まえ、91人のクラスでは個を重視する日本の学習指導法の実施が難しいと判断したからである（日本の小学校は1クラス40人以内である）。児童の人数が多すぎると短い時間の中で、全ての児童の学習状況を把握することが難しく、一人ひとりに対応することも大変である。また、「一人っ子政策」のために、中国はすでに少子高齢社会に入っており、小学校の新入生は年々減少傾向にある。人数を減らした授業は中国の将来の学校状況に合致し、こ

れからの学習指導方法を模索することには意義がある。

本授業では、毛筆で学習したことを日常の硬筆活動に生かすための授業として、一枚の練習用紙（ザラ紙）に同じ文字を毛筆と硬筆の両方で練習できるようにした。また、自分のめあてを設け3種類の練習用紙を選択したり、試し書きとまとめ書きを比較し成果を確認した。また、一文字についてその原理原則を分析、練習した後、他の文字に発展させたり、評価基準を提示し、児童たちが基準に基づいて行う自己評価などを盛り込んだ。

- [授業対象：5年生 36人]
- [場所：済寧市霍家街小学校]
- [授業時間：2006年3月14日(50分)]
- [単元名：文字の組み立て方の学習]
- [教科書：九年義務教育山東省五年制小学校写字毛筆第四冊(臨書)]
- 事前調査：前もって、児童たちに「屋」という字を書いてもらった(実態文字)。全児童のあらゆる「屋」字の分析を通して、児童が文字を書く際に度々出てくる問題をまとめ、それを児童が授業を受ける際の学習ポイントとした。

4.2 学習指導案

2006年3月14日

済寧市霍家街小学校5年 36名
授業者 福岡教育大学大学院生 李 峰

(1) 単元名： 文字の組み立て方の学習 [内容：「屋」を中心とした「尸」部の文字の学習]

(2) 単元設定の理由：

○社会観

1997年中国教育部が公布した《九年義務教育全日制小学校の写字教育指導綱要(試用)》では、は次のように指摘している：「写字は小学生が備えるべき重要な国語の基礎的訓練の一つである。写字教育は小学校の国語の教育において重要な構成部分である。写字教育をきちんとすることは、学生の学習と今後の仕事に対して重要な作用をもたらす。」

「指導綱要」で定められていること：「小学校の写字の授業の目的は、学生達は鉛筆と万年筆で文字を書ける上、毛筆を学び、漢字を正しく書く能力を育て、授業の成果を定着させ、学生の我が国の言語と文字を心から愛する心情を養う。情操を薫育し、審美の能力を高め、まじめな学習態度と意志と良い品格を身につける。」

ここ数年、社会の発展につれて、コンピュータ、携帯電話、プリンターの普及、情報の手渡し的手段はますます便利になり、このような環境の下で本校の児童にとっては、コンピュータを使うこと、携帯電話などで情報を発信すること、プリンターを用いて印刷することが、日常生活においてごく自然な事になってきている。これらの機械が私達に便利さをもたらすと同時に、私達の日常生活の中にも大きな影響が出てくる事が予想される。それは、人々が日常生活において字を書くことは当たり前行為であるが、パソコンが普及されることによって「書くこと」が「打つこと」になってしまうということである。漢字を手書きする機会がますます少なくなって、多くの人がペンで字を書かず、キーボードで打っている。両親や先生の中には、世界はすでにコンピュータの時代に入ったと思い、漢字を手書きすることはすでに後れている行為であり、自分の子供や他の児童は将来書家にならないだろうし、無理をして写字を学習する必要はないと考えていると思われる。このような言論の下で、一部の小学校では、すでに字を書く授業を行う必要はないことを提案し、ある学校では写字の授業時間を減らして、さらに、ある学校は写字の授業を取り消している。そのため、多くの児童は真剣に書かず、字を書くレベルは低くなる一方であり、速く、美しく、正しく書くことに対して、いろいろな問題が生じ、心配されている。それでは、どのようにして児童の写字能力と興味を高め、後れている教育の指導方法を改善するか、またはどのようにして学生に手書きの漢字の優位性を理解させ、数千年の漢字の文字文明を保護し発展させるか、これらはすべて私達の直面する重要な課題であると考えられる。

○指導観

① 自ら考え、自ら学ぶ活動を支援する写字学習

小学校の授業の多くが教師側からの一方的なものであり、児童が自ら考える活動は少なく、学習内容を教えるのみの授業なのではないだろうか。特に写字の場合は、過去数年間、これは、写字の授業時間が削減されることが多いにもかかわらず、学習内容が非常に多く、教師からの一方的な授業になりがちと思われる。このような指導方法の下で、授業の中で児童は教師の話の話を聞くという時間が多く、自ら考える時間が少なく

なるのは当然の事である。習った事は、先生から教わったポイントのみである。これらの知識は児童が自分で発見したものではなく、先生から教わった要点だけをしっかりと覚えたものである。このような指導方法は長い目で見ると、本当に児童のためになるとは言えないのではないだろうか。そこで、今回の授業は児童が自ら学び、自ら考える授業を主として、児童達に一人で課題を発見させ、自分の目標（めあて）を設定し、それから課題を解決する方法を自ら探して、最後に自分の目標を実現させる。全体の学習指導の過程の中で、先生は支援を中心に行い、児童が一人で課題を解決する能力を育てることを目的とする。

② 個を生かす書写の学習

児童たちは学習方法を把握して、学習内容と共通の学習の目標を明確にして、自分のめあてをつかみ、自分なりの考え方や方法を生かしながら、自分の課題を解決していく中で達成感や充実感を味わう。授業の過程で新しい発見や自分の成長の実感が、次への探求心や解決力に繋がるのではないかと考える。本授業では、試書した文字を整えられた文字に改善するためには、児童たち個々に課題は違うはずである。児童が練習用紙の中で、自分の課題にそって練習用紙を選択して練習する事によって、自分の課題を解決する授業をした。

③ 硬筆と毛筆の関連指導で、日常化を目指す書写学習

社会の発展に伴い、毛筆は日常の筆記具としてすでに歴史の舞台から消えさり、硬筆が普及している。それではなぜ小学校ではまだ毛筆の授業を設立しなければならないのだろうか。ただ硬筆授業だけを開けばよいのか。児童たちは書家を目指す場合を除いて、毛筆の字を学ぶ必要はないのか。よい毛筆の字を学んで硬筆の字のレベルを高めることができるか。また、日常化を目指すための毛筆と硬筆の関連指導（例えば、硬筆の字を書くために毛筆の字の学習を行う）の意義があるか。こうした疑問は、すべて中国の写字教育において探求しなければならない重要な課題である。

本授業では、毛筆で学習したことを日常の硬筆写字活動に生かすために授業を工夫したい。その具体的な方法として一枚の練習用紙に同じ文字を毛筆と硬筆の両方で練習する用紙を作成した。

その具体的な方法として一枚の練習用紙に同じ文字を毛筆と硬筆の両方で練習する用紙（更紙）を作成した。新聞紙を下敷きの代わりにし、毛筆で書いた後、すぐに、止め、はね、はらいなどをしっかり意識し、リズムに注意しながら毛筆で書くのと同じように、硬筆で書く。毛筆で学習したことを硬筆に生かすことができるようにしたい。

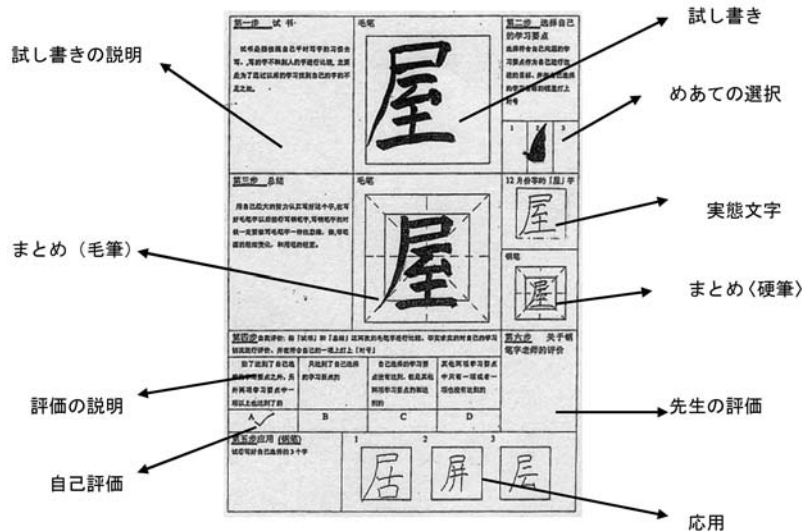
授業の展開としては、まず、児童たちの実態文字を調査し把握して、共通の学習目標を作成する。児童たちの日頃書いている文字はそれぞれ違うので、個を生かすために、自分の試し書きと規準文字を比較させ、自ら考えて、自分のめあてを明確にし、めあてを大事にしよう意識しながら自ら学び、努力し解決していく。このことは、個を生かすと同時に、自ら考え、学ぶという自己学習能力の向上にも寄与するものである。そして、自己評価を取り入れ、試し書きとまとめとを比べて、評価規準によって、自分のめあての到達度を確認して評価する。自己評価は児童の学習を動機付け、彼らの学習意欲を喚起する働きも持っている。そして、第三者からの評価に比べて、自己評価はその後の学習に与える影響も大きく、より持続すると言われている。したがって、学習の効果を挙げるといって、自己評価の果たす役割は重要である。しかし、自己評価には主観の入る込む余地が大きく、信頼性にやや欠ける傾向があるということである。したがって、今回の自己評価は、漠然とただなんとなく「よくできた」「できた」「もう少し」と判断するのではなく、到達度評価で評価基準を明確にし、児童たちが基準に基づいて評価できるように工夫した。

(3) 単元の目標

文字の組み立て方の原理原則を理解して、整えて書けるようになる。

(4) 学習指導計画（2時間扱い）

①「屋」を中心に「尸」部がある文字を学習する。（本時）



②「尸」部以外の文字（P38の図2参照）の組み立て方を学習する。

(5) 本時の目標

- ①「屋」を整えて書くことができるようになる。
- ②毛筆で学習したことを硬筆に生かすことができる。

(6) 教材・教具

- ①九年義務教育山東省五年制小学写字毛筆第4冊（臨書）
- ②学習プリント ③毛筆 ④万年筆 ⑤練習用紙 ⑥新聞紙 ⑦黒板提示資料 ⑧テレビ・ビデオ

(7) 本時の学習展開（50分）

	学習活動	教師の関わり	時間	備考
導入	1 挨拶，準備。本時の学習内容を知る ・授業の流れを黒板に提示する。	・「屋」という文字の毛筆による学習によって，ポイントを見つけ，毛筆で書いた後，毛筆で書くのと同じように硬筆で文字を書くという説明をする。	5	教材と用具 用材の確認 （万年筆と新聞紙など）
展開	2 空書（筆順を確認する。） 3 毛筆で試し書きをする。 4 共通のめあてを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">「屋」を自分のめあてに沿って整えて書こう。</div>		10	学習プリント 黒板提示資料（めあて）と対照用文字
	5 規準文字を見て，整えて書くための原理原則を発見し，発表する。	・ポイントを発見できない場合は，補助線を入れる	10	学習プリント ビデオテープ
	6 試し書きと規準文字を比較し自分のめあてを選択する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">①しかばねかんむり「尸」の上部の中心は，文字全体の中心にあわせる。「至」部分の中心は，少し文字全体の中心線から右へ偏る。 ②しかばねかんむり「尸」の第1・2画目の横画の長さ「至」の第1画目の長さは大体同じ。 ③しかばねかんむり「尸」の第1・2画目の横画と「至」の第1画目の，3本の横画は，画と画の間を同じくらいにする。</div>	・ポイントの選択について説明する。		
	7 演示をみる。	・毛筆と硬筆両方を範書ビデオで見せる。特に硬筆書く時の筆使い，筆圧等を分かりやすく説明する。		
	8 練習用紙を理解する ・自分のめあてにそって練習用紙を選択する。 9 自分のめあてにそって練習する。 ・書くとき，自分のめあてを大事にし，毛筆で書いた後硬筆で書く	・練習用紙の選び方を助言する。 ・机間指導をして，めあてが達成できているかどうか確認する。	12	練習用紙
まとめ	10 まとめ書きと応用 ・応用では，「居」「届」「屏」等文字の中から選択して硬筆で書く。		5	学習プリント
	11 発表する	・頑張ったところやめあてが達成できた事などを発表させる。	3	ビデオカメラ 学習プリント
	12 自己評価 ・自分のめあて達成度確認し，客観的に評価する。	・自己評価について説明する。		
	13 挨拶・片づけ		5	

4.3 アンケートの分析について

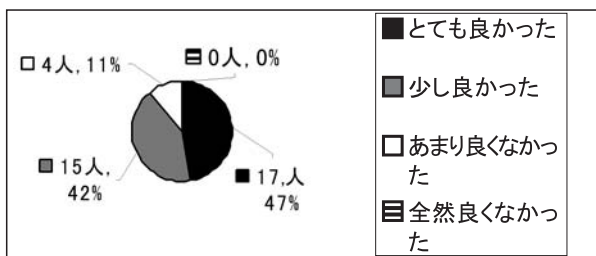
当日授業が終わって、授業を受けた児童と授業参観をしていただいた先生方にアンケートを実施した。回答数は、児童36名全員、先生方12名である。また、それぞれの項目後の理由記述欄は自由回答である。

4.3.1 児童と先生共通の質問項目

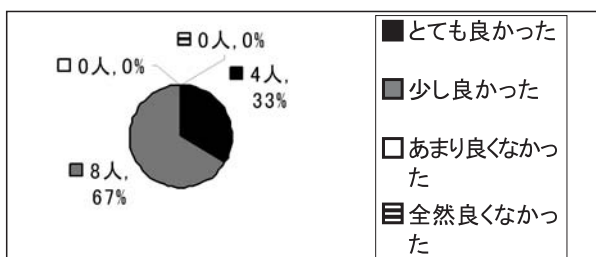
i) 「試し書きとまとめ書きをし、50分の授業で成果を確認しました。この試し書きとまとめ書きについてどのように思いましたか？」

- ①とても良かった ②少し良かった
③あまり良くなかった ④全然良くなかった

〔児童〕



〔先生〕



試し書きとまとめ書きについて、「とても良かった」と「少し良かった」を選択した児童は89%であった。

11%が「あまり良くなかった」の印象を持っている。「あまり良くなかった」を選択した児童の意見にあげられた理由は次のように書いている。

- (a) 字がうまくかけないから。字形が良くないし、線質も太すぎる。
(b) 試し書きとまとめ書きを比べて、あまり変わっていなかったから。

以上の理由から、児童はこの質問に対し、まとめ書きにおいて、できたかできなかったかでアンケートを回答しており、試し書きとまとめ書きによって成果を確認するという学習方法について回答しているわけではない。アンケートの質問の仕方がよくなかったと考えられる。その他には、研究授業のため、50分の授業の中で、90分の内容を取り入れ、書く練習時間が不足したことも原因の

一つであると考えられる。

先生へのアンケートでは、33%が「とても良かった」、67%が「少し良かった」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

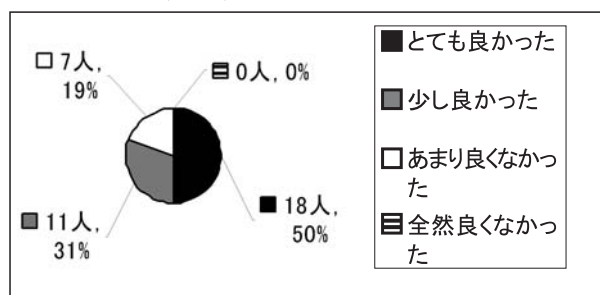
- (a) このような方法は、児童自身が自分の進歩を見ることができ、自信を持つことができる。
(b) とても必要である。現在の学習の法則に合っている：試みて、反省する中で学習する。
(c) 成功する喜びを感じることができ、成就感を持つことができる。

「あまり良くなかった」、「全然良くなかった」を選択した先生はいなかった。

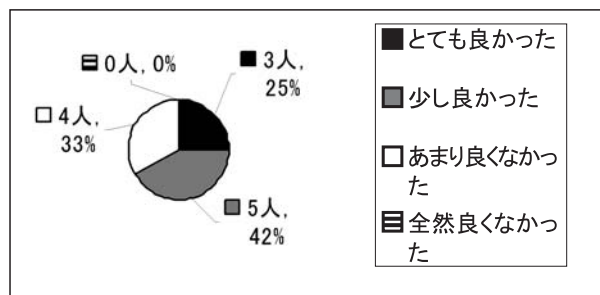
ii) 「練習用紙は、自分のめあてにそって練習する上で、どうでしたか？」

- ①とても良かった ②少し良かった
③あまり良くなかった ④全然良くなかった

〔児童〕



〔先生〕



練習用紙について、「とても良かった」と「少し良かった」を選択した児童は81%であった。

19%が「あまり良くなかった」の印象を持っている。「あまり良くなかった」を選択した児童の理由は次のようである。

- (a) おそらく1点だけに目を入れていたら、他の部分が軽視されてしまうから。
(b) もし、たった一つの練習をしていたら、その一部分はできるようになるが、元々できていた部分ができていないように見えるから。

- (c) 私は、模写をするのは得意であるが、ひとたび自分で書くとなるとできなくなる。
(d) 自分が選んだ欠点を練習するばかりでなく、他の欠点も注意する必要がある。

児童の理由から、児童は様々な課題を抱えていたことがわかる。

この授業の中では、三つのポイントを設けている。児童はこの三つの中から一つを選択し、それを自分のめあてとする。そして、自分のめあてにそった練習用紙を選択し、それぞれが練習を行う。練習用紙の選択の仕方は、めあてに沿って一種だけを選択するというものである。

このような学習計画を設定した理由は、次のとおりである。

つまり、文字を整えるためには、どの文字でも多くのポイントがある。36人多様な書写力を持つ集団に対し、それらのポイントを全て提示し一律に40分—50分という短い時間で満足できる状態にまで高めるという指導には、限界があると思われる。

毛筆書写に対する興味関心を育てるためには、学習目標に到達した時の達成感、成就感を多く体感し、自信を持つことが何より必要であろう。したがって、児童の実態文字より3つのポイントを設定し、その中から、特に、自分に沿って課題があると思われるものを自分のめあてとして設定するという方法で、今回は意図的に難易度を下げて授業を行った。

児童の理由を見ると、これまで児童が受けてきた書写の授業において、まとめ書きでは、常にきちんと整った文字でないと、高い評価は得られないという教育観によって記述されていると思われる。

児童は練習するポイントが全面的に足りないと感じたけれども、これは最初の段階なので、学習が深まっていくにつれて、次第に難易度を上げていくことができる。例えば、自分が不足しているところに基づいて、2種類、或いは全部の練習用紙で練習を進めていくという学習も可能である。或いは、自分で練習用紙を作成するように指導することもできる。

先生へのアンケートでは、25%が「とても良かった」、42%が「少し良かった」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

- (a) 異なる学習目標に対しての学習指導内容を制定すべきであると思う。

- (b) 教材研究は念入りに行い、細かい点も注意することはとても必要なことであると思う。
(c) 的確であると思う。

「あまり良くなかった」と「全然良くなかった」を選択した先生が33%おられた。その理由として、次のように書いている。

- (a) 少し複雑で、児童が理解するのにはっきりしないと思う。
(b) こまごまと煩わしいと思う。

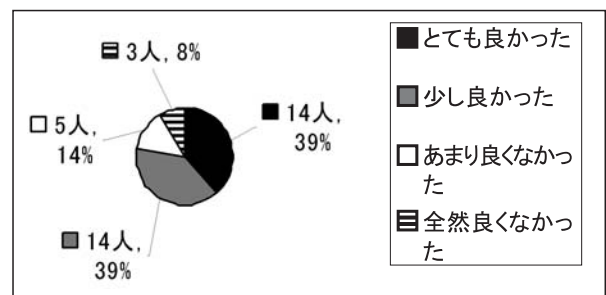
先生の理由から、今までの、いつものような一律な指導でいいと思う教育観による本音の見える記述であろう。

この小学校が使用している教科書を見ると、一つの部首或いは一つの文字全体の練習が比較的多い。しかし、きちんと整えて文字を書くのに注意しなければならないポイントや、児童が練習する中で出てくる問題に対しての学習目標や練習を進める方法についての内容は比較的少ない。自分のめあてを立てるということでは、個々に合せた学習指導を目指すために必要な学習活動である。

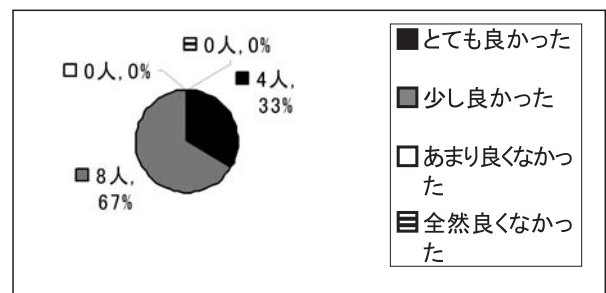
iii) 「一枚の練習用紙で、毛筆の練習を終えてすぐに硬筆の練習をしました。このような学習方法についてどのように感じましたか？」

- ①とても良かった ②少し良かった
③あまり良くなかった ④全然良くなかった

〔児童〕



〔先生〕



児童へのアンケートでは、78%が「とても良かった」と「少し良かった」の回答を得た。

22%が「あまり良くなかった」と「全然良くなかった」を選択した児童で、その理由として、次のように書いている。

- (a) そのようなやり方は気が散ってしまう。
- (b) 本来毛筆を練習した後は手が痛い、もしすぐに硬筆で書くと手が疲れていて思うように動かない。
- (c) 何回も筆と万年筆を換えていたら、手が墨汁で汚れてしまう。
- (d) 万年筆で書いている時、毛筆がそばにあって簡単に倒して、机を墨で汚してしまう。

(a) の回答の原因は、初めての学習方法で馴れておらず、とまどいの中で、集中できなかったことが考えられる。(b) の回答の原因は、中国では、小筆と大筆の持ち方はどちらも基本的に同じであるが、鉛筆の持ち方についてはこれとは全く異なる指導をするため、毛筆を練習した後、もしすぐに硬筆で書くと手が疲れやすいと考えられる。(c) (d) の回答の原因は、一つは研究授業のため、時間が短い上に、学習内容が多く、児童はそれぞれの学習を慌しく進めなければならなかったことが原因として考えられる。(d) の回答については、用具として筆置きがなかったことや机が狭いこと等、物理的な問題も大きいと考えられる。

普段の授業の時は、学習内容も絞られ、時間にもゆとりがあり、さらに、書いた作品や道具を置く配置について、先生からきちんと指導があれば、もう少し問題が改善されると思われる。

先生へのアンケートでは、「あまり良くなかった」と「全然良くなかった」を選択した先生はいなかった。33%が「とても良かった」と67%が「少し良かった」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

- (a) このように毛筆の技巧は硬筆の中で応用することが出来ると思う。
- (b) 字の組み立て方は同じである。毛筆で学習した組み立て方や点画は直接硬筆の中で応用できると思う。
- (c) 毛筆の運筆や止めは硬筆の中で同じように重要であると思う。
- (d) 毛筆学習は硬筆を練習することでさらに強化することができ、毛筆は硬筆の練習の助けになると思う。
- (e) このような学習は一つの練習をするよりも効果が大きい。

日本の場合、平成11年5月に出版された「小学校学習指導要領解説・国語編」の中で、毛筆学習に関する部分について、次のように述べられている。

筆使いは、点画を書く要領や字形を整える方法を理解したりするうえで効果があり、「文字を整えて書く」ための基礎的な事項ともなる。特に現代活字文化の中、リズム感を持って文字を書くためのとめ、はね、払い等筆の終筆部が歪曲され、誇張されて表現される傾向が散見されるようである。こうした問題点の是正と併せ、文字を手書きすることの重要な入門として位置つけることができよう、つまり、一定の連続感の中で文字を書こうとする際、次の点画に合理的に続けようとしたり、整えようとしたりする気持ちが具体的な形として表現されたものが、とめ、はね、払いである。(中略)

毛筆による書写の学習では、さらに、点画の接しかたや交わり方、点画の方法についても確認がしやすい、日常的に使用される硬筆では理解されにくい部分や書き方も意識的に大きく書きことにより、具体的なものとなっていく。さらに、筆先の弾力を生かしながらリズムカルに書くという利点もある。(中略)

日常書写用具が硬質化していく実態の中、点画の基本的な理解や効率よい書写のリズムを習得する上で、毛筆が担っている役割は大きい。手本との近似を競うばかりのような学習の在り方を改め、文字の書き方や基本原理を学ぶための用具としての位置付けを明らかにし日常書写に確実な力を与える学習を展開することが必要である。

中国の《九年義務教育小学校の書写教育指導綱要》の中では、毛筆と硬筆の関連に関する内容はほとんど書かれていない。中国小学校写字の教科書(人民教育出版社最新出版の写字教科書)についても、硬筆と毛筆が2冊に分けられており、あたかも別々に授業されるように編集されている。これは、毛筆と硬筆の間には、何も関係がないという印象を児童に印象付けてしまうことである。

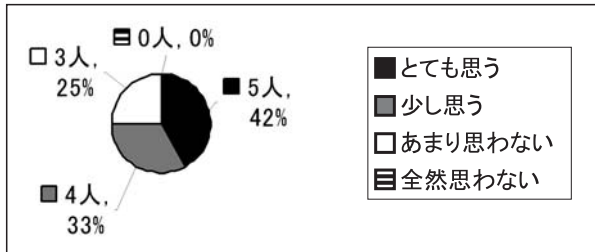
しかし、先生へのアンケートでは、12人と少ない対象者数ではあるが、全員が硬筆と毛筆一体化の授業について賛同していた。12月に私はこの小学校で先生方の硬筆の作品を拝見する機会を得た。ほとんどの先生は毛筆の筆使いのような硬筆で書いていた。右払い、左払いなど、できるだけ毛筆の点画を取り入れていた。先生の中には毛筆の線質を出しやすい特性の万年筆で表現していた。

関連して、このことについて先生方へのアンケート

トの中では、次のような質問もしている。

「毛筆文字がうまく書ける人は、普段の硬筆文字もうまく書くことができるようになる」と言われることがあります。この言葉について、そのように思いますか？」

- ①とても思う ②少し思う
③あまり思わない ④全然思わない



グラフのとおり、先生へのアンケートでは、42%が「とても思う」と33%が「少し思う」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

- (a) 毛筆と硬筆の文字の組み立て方と点画は同じである。
(b) 毛筆の筆使いは万年筆の練習に応用できる。

25%が「あまり思わない」の回答を得た、その理由として、次のように書いている。

- (a) 一定の関係があるが、必然的な関係はない。
(b) 絶対そうではない。

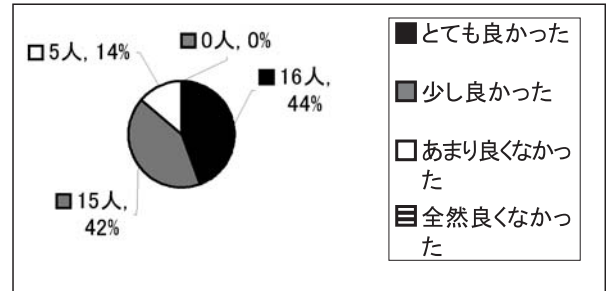
このことから、多くの先生は硬筆と毛筆の関連はあり、関連学習、一体化学習が必要と考えている。一方で、毛筆でうまく書ければ硬筆も書けると考える先生の割合は減り、「あまり思わない」の (b) の回答のように、「絶対そうではない」と断言する先生もいた。

中国において、毛筆学習と硬筆学習の意義を見つめ直し、何のための学習であるのか再検討しなければならないであろう。また、硬筆のための毛筆学習を中国において位置付けるためには、小学校教材の改革や意識改革が必要であろう。

iv) 「自分の課題を自ら見つけ、課題にそって練習するという写字の授業についてどのように感じましたか？」

- ①とても良い ②少し良い
③あまり良くない ④全然良くない

〔児童〕

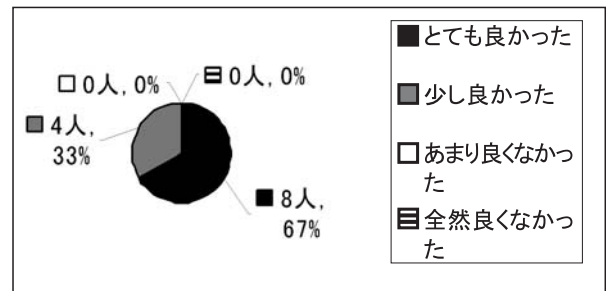


グラフのとおり、児童へのアンケートでは、86%が「とても良かった」と「少し良かった」の回答を得た。

14%が「あまり良くなかった」と「全然良くなかった」を選択した児童で、その理由として、次のように書いている。

- (a) 学習ポイントは重要ですが、他のところも注意しなければならない。
(b) 全面的に学習するべきだ。

〔先生〕



先生へのアンケートでは、「あまり良くなかった」と「全然良くなかった」を選択した先生はいない、67%が「とても良かった」と33%が「少し良かった」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

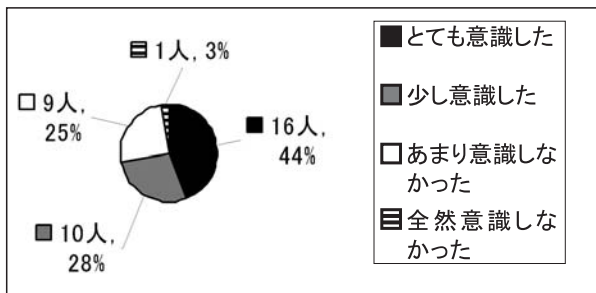
- (a) 実施する可能性が高い。
(b) 練習の目的がはっきりしていて、個々に応じた指導で、個性を生かす指導が実現できると思う。
(c) 児童が本来持っている力を発揮することができる。
(d) 自分の選択した学習のめあてに沿って練習することによって、しっかり学習することができる。
(e) 自分で授業の学習目標以外のめあてを制定する必要がある。
(f) この学習指導方法を続けてやると、児童はすぐに自分の学習目標を見つけることができ、書写に対する興味が持続すると思う。

児童の (a) (b) の回答から見ると、彼らは現

在の授業の難易度に対して満足できておらず、さらに学習する意欲を持っている。これはとても良い点であるが、多くの児童がいる状況を考慮して、まず初めに児童に授業を通して写字に興味を持たせ、文字を書くことに対する自信や、学習目標を達成した成就感を体感させる必要がある。そのため、学習の入門段階として、学習ポイントの数やめあてを選択する上で意図的に難易度を下げることにした。三つのポイントの中から一つを選択して、それをこの授業で自分のめあてとする。大切なことは自分のめあてであり、まずはそのめあてが達成されることが重要であり、ついで、他の二つのポイントについても注意しながら書かなければ、評価は上がらないという方法をとった。中国の児童たちはこれまでこのような学習指導方法に接していないので、所々理解ができないのが普通である。学習が深まるにつれて、写字レベルが高くなったクラスでは、次第に難易度を上げていくことができる。例えば、授業中に自分の学習状況に基づいて、自分のめあてを2個或いは何個でも選択することができたり、また、自ら自分の課題を見つけ出し、めあてとなるポイントを自分の言葉で作出すなど、難易度を上げていくことができる。

4.3.2 児童のみの質問項目

i) 「この授業において、毛筆で文字を書くように意識しながら、硬筆で文字を書きましたか？」
①とても意識した ②少し意識した ③あまり意識しなかった ④全然意識しなかった。



グラフのとおり、児童へのアンケートでは、72%が「とても意識した」と「少し意識した」の回答を得た。

25%の「あまり意識しなかった」と3%の「全然意識しなかった」を選択した児童は、その理由として、次のように書いている。

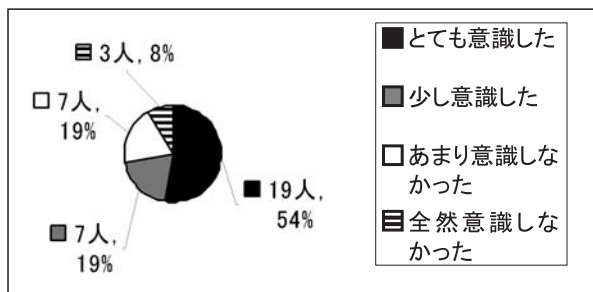
- (a) 毛筆には毛筆の書き方があり、硬筆には硬筆の書き方がある。規則が異なるため、毛筆と硬筆を同じ書き方で書くことはできない。
(b) 毛筆と硬筆の持ち方は異なるため。

これについては、1) 児童と先生共通の質問項目でのiii) においての分析と同様のことが言える。

(a) (b) の回答に関しては、まず、初めに現在小学校の写字の授業は毛筆と硬筆が分けられている。教科書を見ると、硬筆の学習は、児童が国語の授業で文字を正しく整えて書くために練習する場となっており、古典にはまったく触れていない内容である。そして、毛筆の練習は児童に中国の伝統文化を理解させるものであり、練習以外では古典を鑑賞する授業も加えられている。5年後期からは次第に手書き文字の学習から古典の臨書を学習へと変わっていき、ますます硬筆との差が開いてくる。したがって、毛筆学習と硬筆学習の共通点はある（組み立て・字形等）が、実は完全に2種類の目的に分けられているということが出来る。これは、日本の毛筆と硬筆の一体化を強調する指導とは少し異なる。児童自身、毛筆と硬筆は別々のものであり、毛筆と硬筆とは関連がないと思っていることが一つの原因であろう。

ii) 「自分の課題を達成できるように、自分のめあてを意識しながら書きましたか？」

- ①とても意識した ②少し意識した
③あまり意識しなかった ④全然意識しなかった



グラフのとおり、児童へのアンケートでは73%が「とても意識した」と「少し意識した」の回答を得た。

27%が「あまり意識しなかった」と「全然意識しなかった」を選択した児童で、その理由として、次のように書いている。

- (a) 書くとき、他の部分も注意して書いたため、めあての部分上手くかけなかった。
(b) 自分のできない部分が多い。

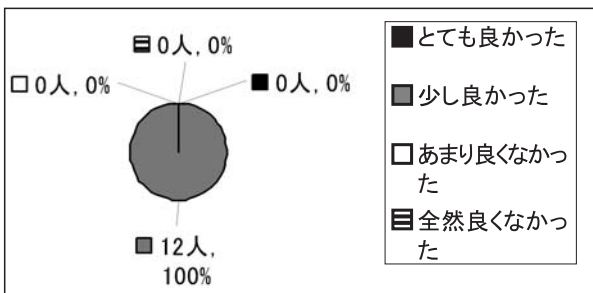
(a) (b) の回答については、これまでの長い間、小学校写字の授業は先生の範書と児童の反復練習が主であり、児童が自ら考え自ら学ぶという授業は非常に少なかった。特に写字は授業時間が少なく、その少ない中で、日本よりも多くの漢字を学ぶことになっており、効率よく学ぶという教科書

の編集にはなっていない。そのため先生方はそのような授業方法を行ってしまうと考える。したがって、自分のめあてに重点を置いて学習することに対する意識がなく、この学習方法に慣れてないことが原因の一つであろう。

4. 3. 3 先生のみ質問項目

i) 「一つの文字で整える書くための原理原則を学び、その学んだことを他の文字を応用するという日本の書写の学習方法について、どのように思いますか？」

- ①とても良かった ②少し良かった
③あまり良くなかった ④全然良くなかった



グラフのとおり、先生へのアンケートでは、100%が「少し良かった」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

- (a) 一つのことを学習したら、他のことにも応用することができる。
(b) 学習内容を新しく作り出すことは、将来児童の成長のためになる。

アンケートの結果から見ると、この授業が「とても良かった」と思っている先生は一人もいなかった。これは中国の小学校写字の学習指導方法と日本の学習指導方法が異なることが関係していると思われる。小学校の教科書から見ると、児童たちは1単位時間40分の間に8個の部首と16個の漢字を学習しなければならない(P38図2の2ページ分)。1単位時間に1文字によって、整えて書くための原理原則を学び、学んだことを他の文字に応用するという日本の書写の学習方法と同じ方法で行われている学校は、中国では非常に少ないと思われる。

12月に試行の研究授業を終えた後、先生方と討論をしている際にも、1単位時間に1文字しか学習しない指導方法に、多くの先生は大変驚き、1単位時間に学習する内容が少なすぎると考えていた。

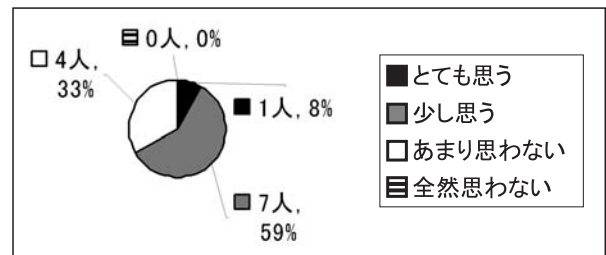
中国では小学生は約2500字の漢字を学習し、日本では1006字の漢字を学習するというように、学

習する漢字の数が異なる。このような指導方法を中国で応用すると、小学校のうちに全ての漢字を学習し終えることができないことと、児童の学習効果が上がるかどうか分からないことを心配しているのが主な原因であると考えられる。

しかし、このことは、逆に日本では漢字のみではなく、筆使いの異なるひらがなを合わせて学習しなければならないということがある。中国において、漢字の文字数は多いけれども、整えるための原理原則を学び、他の文字に発展させる学習方法は、中国においてこそ有効な方法ではないだろうか。

ii) 「今日見た授業のような、日本の書写指導方法を取り入れた授業は、中国において必要であると思いますか？」

- ①とても思う ②少し思う
③あまり思わない ④全然思わない



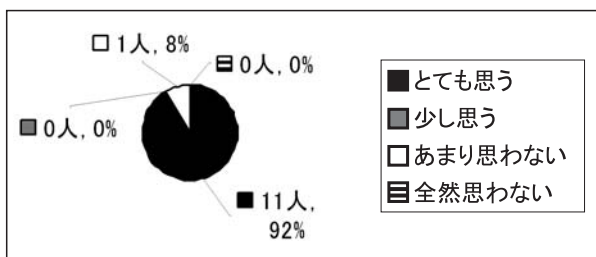
グラフのとおり、先生へのアンケートでは、8%が「とても思う」の回答であり、59%が「少し思う」の回答を得た。33%が「あまり思わない」の回答を得た、その理由として、次のように書いている。

- (a) 中国の国や学校の現状に合っていない。

今回の授業は研究授業であるため、50分の中でできるだけ多くの学習内容を含んでいた。事前の準備もかなり時間をかけて行った。それは、授業見学していただく先生方に、これらの中国と異なる学習指導方法をできるだけ多く盛り込み、それに対する意見をもらいたかったことと、中国でも意義のある学習指導内容は、これからの学習指導に取り入れてほしかったためである。日本においても日常の授業では毎時間決してこのようではなく、先生方の中には研究授業の性格を誤解され、毎時間このような学習内容と準備物の多い授業を行うことは、とても無理であると単純に思われたからと思われる。

iii - 1) 「小学校で硬筆の学習は、必要であると思いますか？」

- ①とても思う ②少し思う
③あまり思わない ④全然思わない



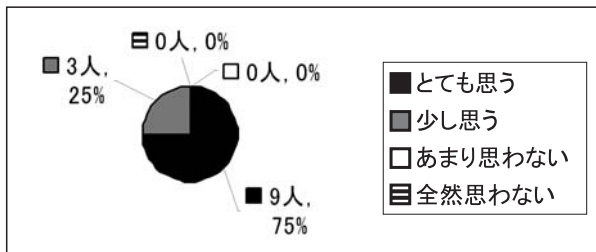
グラフのとおり、先生へのアンケートでは、92%が「とても思う」の回答を得た。その理由として、次のように書いている。

- (a) これは生活に必要な技能である。
(b) 小学校から書写の勉強をするほうがよい。

8%が「あまり思わない」の回答である。その理由は書いていない。

iii-2) 「毛筆は日常の筆記具としてすでに歴史の舞台から消え去っています。硬筆が普及されている現代において、小学校においては、毛筆学習は必要であると思いませんか？」

- ①とても思う ②少し思う
③あまり思わない ④全然思わない



グラフのとおり、先生へのアンケートでは、75%が「とても思う」と25%が「少し思う」の回答であった。その理由として、次のように書いている。

- (a) 毛筆は中国の伝統文化であり、国粹である。
(b) これは一種の芸術であり、児童にきれいな字を書かせる以外に、人格を磨き養う作用がある。
(c) 毛筆は中国の伝統文化であり、継承され、学校教育の中に取り入れるべきである。

硬筆学習の重要性は、中国の《九年義務教育小学校の写字教育指導綱要》等において、特別に強調されていないが、iii-1) 項目の先生たちの理由から、硬筆は日常でもっとも身近な道具であり、小学写字の中でも最も重要な部分であると考えられている。アンケート調査から見ると、ほとんどの先生は小学校で硬筆を学習することはとても必

要だと思っている。

iii-2) 項目の先生たちの理由は、2002年5月、中国教育部が公布した「中・小学の写字教育を強化する意見」において同様のことが記述されている。その内容は、以下のとおりである。

初歩的な書法の鑑賞能力を身につけることは、中国の公民として基本的に持つべき素養であり、基礎教育課程の目標の一つである。

中国の書法は漢字の意味を表す効果と、造型の芸術が融合されたものであり、長い歴史と多くの人々によって支えられてきたものである。漢字を書くことは国境を越えて、使用範囲が認められている美学に値する。したがって、写字教育は児童の情操を陶冶し、審美感を養い、祖国の言語を愛し、文化を理解することができ、字を書く技能を高め、学識を修養することにも役に立つ。

目前に、パソコンで文字を打つことを身につけることが重視される中、小学校で漢字をきれいに書くことは強調し続けなければならない。

中国民族の優秀な文化を継承・発揚するために、写字の学習は強化するべきであり、削減されるべきではない。

日本の場合、全国大学書写書道教育学会編集した「新編・書写指導」に、次のように述べられている。

昭和33年版学習指導要領から「書写」の呼称のもとに毛筆と硬筆が併せて位置付けられ、毛筆は硬筆書写に役立つよう行うことになった。あえてなじみのない「書写」の呼称を登場させたのは「習字」の語につきまとう「手ならぬ主義・精神主義」から脱却をはかるためであった。以降、ほぼ10年おきの学習指導要領改訂の中で、位置付けや内容に若干の動きを見せつつも、一貫して、「国語」の中の「書写」として、硬筆と毛筆により「文字を正しく整えて読みやすく書くこと」の能力を培うために行われてきているのである。

これらから分かることは、中国の小学校の毛筆学習の目的は日本と大きな違いがある。中国の小学校の毛筆学習は、文字を書く技能を高めるためだけでなく、「中・小学の写字教育を強化する意見」に述べられているように、芸術性を盛り込み、精神主義、愛国主義等が含まれた内容になっている。

iii-1) 項目の中で、一人の先生が「あまり思わない」の回答をしている。しかし、この先生は、アンケートの回答紙を見ると、iii-2) の中では、

「少し思う」を選択していた。この先生は、毛筆学習の必要性については、認めているが、硬筆学習についてはあまり必要ではないと思っている。その原因は、次のようなことではないだろうか。

つまり、「硬筆学習は日常実用のためである。しかし、パソコンが普及している昨今、簡単に読みやすい文字を生み出すことができる、パソコンの学習の方が、整った文字を書く力を身につける学習よりも即効的であり、これからの時代に重要である。」と考えているからではないだろうか。また、毛筆学習は芸術に対する追求で、伝統の文化に対する継承なので、パソコンに取って代わることができない重要な意義を持っていると考えているのであろう。

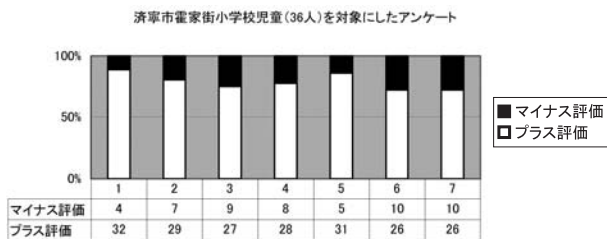
これについては、パソコンの印字文字にはない、手書き文字の良さを我々は主張していかなければならないだろう。

4.4 まとめ

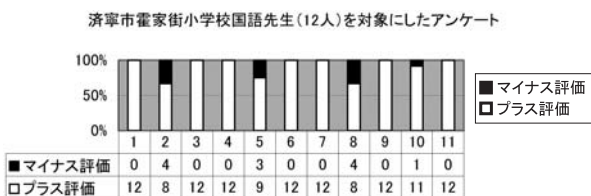
児童と先生へのアンケートの中で、回答項目①②のプラス評価を選択した人数と③④のマイナス評価を選択した人数を比較してみた。

4.4.1 プラス評価とマイナス評価の比較 (授業の成果)

i) 児童へのアンケート7問について



ii) 先生へのアンケート11問について

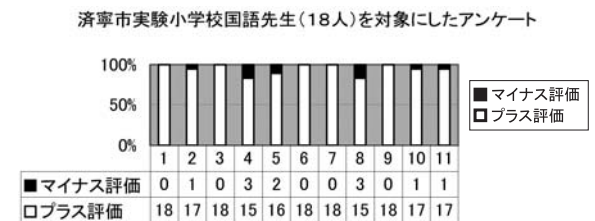


上の表では、多くの児童と先生は、日本の書写指導方法に対して理解することができ、比較的良い評価となっている。もし指導者(李)の指導経験の不十分さと児童が新しい授業に慣れていない要素が除かれれば、もっといい評価が得られるのではないかとと思われる。

このことは、次の濟寧市の他の小学校(濟寧市

実験小学校)において行ったアンケートからも予測ができる。

そのアンケートは、今回の授業を直接参観された先生のアンケート数が、わずか12名であり、回答数が少ないことから、同年の5月下旬に濟寧市実験小学校において同様のアンケートを行ってみた。方法は、3月の濟寧市霍家街小学校の授業ビデオ映像をこの学校の先生方に見てもらい、アンケートに回答してもらった。結果を以下の表にまとめる。



そのビデオは、実技での練習時間の部分や、指導者の経験不足から最初の説明に時間をかけ過ぎた部分、また授業準備不足からプロジェクターの操作に5分位無駄な時間があった部分などの場面をカットし、編集したのを見てもらった。さらに、ビデオ放映前に、日本の書写教育の指導方法についての説明と討論を行ったため、先生方は理論上、日本式の書写教育の指導方法について理解した上でアンケートを行った。そのため、本調査は3月時の調査と比べ、結果においてよりプラス評価が割合として多くなっていると予測できる。

つまり、今回の授業を筆者(李)よりも経験豊富な先生に行っていたら、濟寧市霍家街小学校の先生方へのアンケート結果は、さらに大きな成果が得られたのではないかと考えられる。

また、このアンケート結果より、理論上からのみであれば、中国の先生方は日本の書写指導方法に対して肯定的に考えられるということに、より確信を持つことができた。

4.4.2 実践授業の反省と課題

授業収録ビデオとアンケート結果を分析したことで、次のような授業に対する反省と課題が挙げられる。

反省:

- 授業中、学習ポイントについての説明は時間がかかり過ぎ、児童たちの練習時間が不足することになってしまった。
- 50分の授業の中で、学習内容を盛り込み過ぎ、児童は各項目の学習内容を慌しく進めることに

なった。

- 今回の評価では、三つのポイントのうち、自分のめあてを含めて二つのポイントが達成されたら“A”の評価をするというものであった。練習用紙を選択する前に、自己評価の仕方について説明をしていなかったため、児童たちは自分のめあてだけに集中してしまい、自己評価する時点で、初めて自分のめあての達成だけでは“A”の評価にならないということに気づくことになってしまった。
- 授業前に、実態文字を調査したが、それを三つのポイントを決めるためだけに使用し、児童一人ひとりの課題となる部分を把握しないまま授業を進めてしまい、授業中個別に適切なアドバイスできなかった。
- 小学校所有のプロジェクターを使用する計画があったにもかかわらず、その使用方法について事前に詳しく把握していなかったため、授業中自動的に電源が落ち、再開するまでに5分程度、無駄な時間を過ごしてしまった。

課題：

- 中国では、一般的に毛筆と硬筆は別々のものであると認識しており、毛筆と硬筆の執筆法についても異なる指導をしている。したがって、硬筆のための毛筆学習について、理解されにくい状況がある。今後、中国の先生方と硬筆学習の意義を討論し、共通理解を持った上で、児童たちが混乱することのないよう指導していくべきであろう。
- 今後、中国で授業実践するためには、一人一人個に応じた指導をさらに追求する必要がある。

5. 中国において日本の書写指導方法を活用する上での課題について

先生へのアンケートから、多くの先生方にこの授業の指導方針については賛同していただいた。

しかし、やはり中国と日本では教科書の編集の仕方が異なり、学校の実情も違うので、日本の書写指導方法を中国に取り入れることはすぐには難しいと思われる。具体的には以下のとおりである。

- 一つのクラスの児童数を日本と同じように40人以下にする必要がある。
- 教科書どおりでは、一時間に学習する文字数が多い。
- 80分の授業（2回連続）が必要である。
- 毛筆学習について、手習い的な一律の指導方法という固定観念を打破する必要がある。

- 硬筆のための毛筆学習を位置付けるためには、硬筆学習の意義、毛筆学習の意義を見つめ直すとともに、意識改革が必要である。
- 小学校において、日本の2.5倍の量の漢字を学習する中国においてこそ、一つ一つの文字で整えて書くための原理原則を学び、その学んだことを他の文字に応用するという日本の学習方法を取り込む必要がある。
- 教師自身の資質と写字能力を高める必要がある。
- 小学校写字授業の実施状況に対して、監督する体制が必要である。

おわりに

日中の歴史的・文化的背景の違いによって、書教育に違いが見られる。特に現代においては、日中書写・写字教育には、各自の長所と短所が確実に存在していると思われる。現代のパソコン隆盛の時代において、大きな変革の時期を迎えており、日中両国直近の共通の課題があるはずである。例えば、本研究の中で、硬筆・毛筆の関連学習に関する考え方の問題や、硬筆・毛筆学習のそれぞれの意義を先生方がどのように考えているかを考察したが、そこであげた問題や先生方の意識は、現代の日本においても同様である。つまり、日本の学校教育において、硬筆・毛筆の関連学習が定着しているとは言えないからである。両国は書写・写字教育方面において交流し、相互に学ぶべきであると考えられる。

今回、中国の小学校において、日本の現行学習指導要領の考え方に基づいた書写の学習指導方法によって授業を行い、その授業についての反省・課題を考察し、日本の書写指導方法を活用する上での課題が明らかとなった。今後、それらの課題をもとに、中国の様々な地域の小学校において授業を実施し、さらに研究を深めていきたい。

参考文献

- 中国《九年義務教育全日小学語文教学大綱》1993年
- 中国《九年義務教育小学校の写字教育指導綱要》1998年
- 九年義務教育山東省五年制小学・写字・教学指導書 2004年
- 中国教育部公布「中・小学の書写教育を強化する意見」2004年
- 『新編・書写指導』 全国大学書写書道教育学会編 2006年 萱原書房